

心臓病阻止へ立体画像で挑む

突然死を防ぐ画期的心臓ドックの成果

現在の心臓の状況を可視化し迅速かつ正確な診断を行う匠の技を持つクリニック

院長自らが営業し認知度高め

日本人に多い狭心症や心筋梗塞といった心疾患の死亡率は、がんに次いで多い。発作に襲われて救急車で病院に運ばれても半数の人が助からないという。しかも、大病院や総合病院の循環器内科では時間の問題や高度な検査技術が必要なこと、費用の面で心臓のMRI(核磁気共鳴画像法)やCT(コンピュータ断層撮影法)がなかなか使えない。専ら心電図やカテーテル検査で診断しているのが実情だ。

ところが、日本で唯一、心臓画像診断を専門に行うクリニックがある。循環器内科医の寺島正浩氏が、東京・飯田橋駅近くに開設した「心臓画像診断クリニック(CVIC)」だ。大病院から依頼を受けた患者を即

日、MRIやCTで撮影。なんと2時間後には立体的な3D画像に解析し患者に診断結果を知らせるとともに、担当の循環器内科医に診断結果を提示する素早さ。おかげで大病院や総合病院から依頼が殺到している。

実績がすごい。CVICの月間MRI検査件数は200件、CT検査も200件に上るといふ。日本全国の病院で行われているMRI検査がざっと2万7千件。月間になると2千件強だから、日本中の心臓MRI検査の10割を手掛けている計算だ。

寺島院長は神戸大学医学部を卒業後、スタンフォード大学に留学。一旦、国立循環器病センターに勤務するが、スタンフォード大学が心臓MRI検査のチームを作るときに呼ばれて再渡米。同大学のファカルティ(正規教員)にもなった心臓画像診断

のスペシャリストだ。その寺島院長が開設したCVICは、日本初にして現在も唯一の心臓画像診断専門クリニックなのである。

寺島院長がいう。

「大病院や総合病院では、MRIを脳外科や消化器外科、整形外科でも使うから、循環器内科だけが自由に使うというわけにはいかない。しかも他の臓器のMRI撮影時間は15分程度で終わるが、常に鼓動している心臓のMRI撮影は難しく、4倍の1時間もかかる」

その上、今のMRIやCTはスライス状の画像から立体的な3D画像にするが、その解析処理に高度な技術が必要とされるため、検査技師も少なく、時間も1時間以上かかる。

「さらに心臓MRIは他の臓器の4倍もの時間がかかるのに、診療報酬

がほぼ同じため病院側も消極的になつてしまふ。しかし、当院では専門医師と熟練した技師を揃えているため、30分で解析でき、2時間で診断まで終わられる」寺島院長

もちろん、開設当初はまだ馴染みのない心臓に特化した画像診断クリニックだったため、寺島院長自ら「営業」もした。循環器医が5人以上集まって勉強会をすると聞けば出かけ、画像を見せながら講演したりする。おかげで今や、東大、東京医科歯科大、慶応大、東京女子医大、順天堂大学や心臓血管研究所付属病院、NTT東日本関東病院、厚生年金病院などから心臓MRI診断の依頼がひっきりなしだ。

検査から診断まで2時間半で

今の病院は患者数が多く、午前中



素早く診断(寺島院長)

の3時間に30人の患者を診察しなればならないため、診療時間は1人の患者に6分しかかけられない。しかし、MRIで検査したい患者をCVICに送り込むと、無駄な時間を省けるといふ。

「われわれは紹介された患者を即座にMRIやCTで検査し、2時間後には専門医師が患者に診断結果を説明し、病院に送り返す。同時に病院の担当医にMRI画像と診断結果を送ります。中には患者の検査結果を気にかけて電話してくる先生もいる。検査結果を伝えると、患者に来週

診察に来てくれと伝えてほしい」と依頼されることも多い。患者も家族も、病状とどういう治療が行われるか、われわれが説明することで理解し、次の診察のときにすでに心構えもできている。病院に行けば、VIPでもないのに循環器内科医が待っている。医師も即座に治療に取りかかれる。6分間の診療時間を有効に使えるのです(寺島院長)

病院からの画像診断を依頼された患者の中には治療に急を要する人も多いという。本人はピンピンしていても、心臓の冠動脈やその周囲の血管が詰まってきて、いつ発作が起こるかもしれないような人もいる。CVICでは検査、診断の結果、救急車やタクシーで依頼した病院に送り返す患者が毎日いるそうだ。また、ここではMRI、CTを使った心臓ドック、脳ドックも行っている。多くの人間ドックでは心臓の検査は心電図にレントゲン撮影程度で終わるが、MRIで可視化することで、今、心臓がどんな状態か、こ

のままだと近い将来、血管にステントを入れて広げなければならなくなるのがわかるという。もちろん、MRIの画像解析は素早い。検査を受け、医師の診断を聞き終えるまで2時間半ですんでしまう。

寺島院長が説明する。

「病院からの依頼が8割を占め、2割がドックですが、ドック受診者の中にも急いで治療した方が良いと判断することもある。たとえば、ご主人が夜中に寝汗をかいて水を飲んでいたので心配した奥さんが連れてきたことがある。本人は自覚症状がなかったが、MRI、さらにCTで撮影すると血管が詰まる寸前。タクシーで東大病院に運び、発作を起こす前に事なきを得た例もある」

スターボックスが経営モデル

MRIでは心臓を取り巻く冠動脈やその周辺の血管に脂質の塊(プラーク)ができていくかどうか、あるとすればどのくらいかがハッキリわかるそうだ。プラークが大きくなれば、突然、血管が詰まり心筋梗塞に襲われる。心臓ドックの料金は10万円ほどだが、唯一の心臓ドックとい

うことで北海道から沖縄まで泊まりがけで受診する人もいるという。心臓の病気は「最初の発作が最後の発作」といわれるだけに不安のある人はもちろん、健康な人でも一度、受診した方が良さそうだ。

寺島院長は今後、大都市に同様のCVICを設立していきたいという。「09年の開設以来、すでに1万8千件のCT、MRI検査を行った。この膨大なデータは臨床研究に役立つはず。たとえば、患者に同意してもらい、採血した血液中の動脈硬化マーカーと画像との関連性を調べること、将来、動脈硬化を予測できる可能性もある(寺島院長)

寺島院長は「スターボックスをクリニックのモデルにしている」と語る。スターボックスは米国でコーヒークレージー」といわれたが、創業者は本当に美味しいコーヒーなら必ずニーズがあると信じ続けたと語っている。「CVICもスターボックスのようにクオリティの高いものを提供していくことに徹する(寺島院長)。寺島院長の志が、心臓病治療をさらに効果的にしていく。